



文理分館入口



SACLA 企画展示コーナー



レファレンスカウンター



「読み 詠み 学ぶ—日本語日本文学資料展—」の準備中

文理キャンパスの正門をぐぐり、左斜め前方向に進むと、図書館棟が見えてきます。文理分館のゲートは一階にあります。ゲートをくぐると、文理学部公認の図書館アシスタントサークルSACLAの企画展示などが来館者を歓迎します。地上一階と二階、地下一階と二階、いずれも開架式ですが、地

下書庫へのアクセスには、専用のゲートを通す必要があります。分館蔵書の中には、ふだんは公開されていない貴重書もあります。手続きが必要ですが、研究調査のための便宜を図っています。図書館棟一階にある文理学部資料館では、分館蔵書の企画展示も随時開催されています。

キャンパス点描

—図書館棟その①

日本大学図書館文理分館—



第23号

2025年
6月25日発行

日本大学国文学会

同窓会誌



文理図書館 公式 X

ドバイスを受けることもできます。分館情報は、サイトや公式X（QRコードからアクセスできます）から随時発信しています。図書館スタッフからの一言「研究や学修だけでなく、ちよつと一息つきたい時に読める面白い本も多く所蔵しています。書架に並んでいるからこそ気づく発見や新しい本との出会いをぜひ楽しんでください。皆さんの来館をお待ちしております。」

OB・OGだより

「当て書き」の日々

宇田川 豪大

私は現在、自身の母校でもある、日本大学第二中学校・高等学校で国語科の教員をしております。青春の間でもあった、演劇部の顧問も務めています。オリジナル脚本を執筆していますが、毎回、部員生徒たちそれぞれの個性を活かした「当て書き」です。自分が演じるキャラクターは、手垢のついていない、まさしく唯一無二の、自分でなければ成立し得ないものだという意識が、部員たちの眼差しを生き活きと輝かせます。しかしこれには、かなりの労力を伴うのも事実です。生徒をよく観察し、彼らがどんな話し方をし、どんなことを面白がるのか、いわゆる「生徒理解」とは別次元の理解へと向かって、努力しなければならぬからです。教員生活も慣れてくると、目の前にいる生徒たちを「無視」しがちになってしまします。当然ですが、いつの時代も関係なく、生徒は目の前にいます。そこに興味

を失ってしまったら、教員としての自分の生き方を見直さねばならぬ時なのだと思います。

国文学科時代は、田中ゆかり先生の元で、最初の「田中ゼミ」の一員でした！、能楽研究会に所属し、四年間活動していました。今年の五月、いよいよ悲願であった、高校演劇を能楽堂で上演する機会が叶うことになりました。熱量を損なわず、目標を諦めなければ、未来は確かなものになる。私自身もあらためてそう信じて、今後も「当て書き」の日々を送りたいと考えています。

「二〇〇〇年度国文学科卒業」

字に惚れる

平山 あゆみ

「お前の字は分かる」

二〇二四年NHK大河ドラマ「光る君へ」の劇中で、藤原道長が主人公まひろ（紫式部）に伝えたこの言葉。幾度も文を交わした相手だからこそ言えるセリフに、SNSでは「月が綺麗ですね」に代わる「Love you」との声も上がるほど。私はこの一言にやられた。

字は単に綺麗・汚いという次元ではなく、その人の持つ性格・感性・品格・教養などが滲み出るものだ。年齢を重ねるごとに字は移り変わり、人生と共に色や味が加わる。デジタル化が進んだ現代では、普段一緒に過ごす家族や友人、恋人の字を見る機会は少なくなつた。しかし、ふとした瞬間その人の字に触れた時、例えば飲食店で順番待ちの際に記入する名前を見て「あなたってそんな字を書くのね！」といった嬉しくなってしまう。

私は現在、日本文学を専門に扱う出版社で編集者として働いている。活字で入力された原稿は手書き文字の温かみこそないが、また違った良さがある。誤字脱字や表記のゆれ、読んでいて違和感がないかを確認する校正作業において、癖もなく均一に揃えられた活字はフラットな状態ですらすらと頭に流れ込んでくる。毎日大量の活字と向き合う日々だが「もう文字なんて見たくない！」と思ったことは一度もない。私は字に生かされている。

社会人四年目を迎えた今、大学の授業で少し触れた「くずし字」をもう一度学び直したいと思っている。これからも私の文字好きの道は長く続いていく。

「二〇二二年国文学科卒業」

談話室

①

国文学会・先学・源氏物語

阿部 好臣

百年の歴史を数える本学会に於いて、中古文学の世界は大きな柱として存在したのは、間違いの無い事実である。中古の雄は、当然ながら『源氏物語』であり、この世界に於いても先達の業績は光り輝いている。先ずは山田孝雄の存在である。彼は、本学科の開祖と称しても良いのでは無いだろうか。一九二〇年に日本大学講師に着任し、翌年に日本大学文学部国語科主任となった。『語文』百七十八輯によると一九二八年に国文学会が創設され『国学』の創刊があった時点をもって、始発と認定しているが、始発の認定論争をしようとするわけでも無いので、山田の主任着任をもって、ここは始発としたい。

山田は谷崎潤一郎訳の『源氏物語』への助力などで著名であり、『源氏物語の音楽』の著作もあり、本学に於ける『源氏物語』に関しての研究に於いて、草分け的存在で

あったのは間違いないだろう。そして、十年後ぐらいに、風巻景次郎「桜桃放」、「続桜桃放」（いずれも一九三八年）がある。壮大な考察で、紫上の存在の象徴として「桜」が比定されてあるのは、常識だろうが、その根底を追求する考察であろう。

『風巻景次郎全集』第四巻第一部「源氏物語の成立」（一九六九年）に関わる各種の考察が、一九三九年～一九五〇年と重ねられた。この全集を刊行した桜楓社の社長は國學院大學出の及川篤二であった。桜楓社は、元の名を南雲堂桜楓社と言う。この社名変更には鈴木知太郎が関与したと言う。春秋優劣論における春の桜と秋を象徴する楓からの命名であったのは言うまでも無い。

ネット上の検索によると、風巻は、一九三五年上京し、吉祥寺に住む。この頃、日本大学、二松学舎大学などで講師を務める。官立の帝大の教授達が私学の教授等を務めるのは当時の習いであった。前後する情報に成ろうが、経歴は、愛知県立第一中学校、第八高等学校を経て一九二六年に東京帝国大学国文科卒業。同期には池田亀鑑、塩田良平、等があった。それらから類推して、風巻が本学の先達の一翼を担っていたのは確かだろう。『源氏物語』の研究が、国文学

研究の柱として機能していたのだから、本学にも欠かせなかったのであった。それが如何に本学会とクロスしてきたのだろうか。国文学の世界も第二次世界大戦以後に大きく変革した。諸学会の創設、中古文学会もこのあたりの流れに寄るのであった。

小生の学生時代（全共闘時代）には、風巻は既に本学を離れていただろう。その頃の本学を柱として支えていたのは、当時・学部長であった鈴木知太郎、『清少納言伝記放』の岸上慎二、それに『伊勢物語研究史の研究』の田中宗作の諸先生であった。

中古文学の世界では、更には、色彩研究の新分野を開削された伊原昭、直の先輩としては、岸上門下の杉山重行（元経済学部教授、鈴木教え子の奈古忠国、そして商学部には証本・三条西家本に関わる研究の岡野道夫、柳田忠則があった。後輩としては、杉谷寿郎門下の経済学部西山秀人、国際関係学部には笹生美貴子がいる。

阿部の大学院時代は講師に松尾聡がおり、助動詞の細かなあり方の読みに主力を置いた読解と、有吉保先生の『新古今和歌集の研究 基盤と構成』の教えが小生の『組成論』の発想を産んだのは確かだと感謝している。

〔元国文学科教授〕

談話室 ②

三木露風との出会いと楽しみ

近藤 健史

定年退職を前にして偶然が重なった。忘れられた詩人と評されている三木露風との出会いである。それは近代文学研究の素人である私に、新たな研究の楽しみを与えてくれた。

盛岡市において「盛岡ゆかりの文人たち」という講演依頼があった時、地元の人々が聞き馴染んでいる宮沢賢治や石川啄木以外の文人を調べたところ、三木露風が盛岡市を訪れていたことを知った。大正十五（一九二六）年五月から六月にかけた東北巡講の旅の途中に立ち寄り講演をしたと、地元紙『岩手日報』に掲載されていた。

ちょうどその頃、知人から公的機関などにも全号保存されず大半が散逸したままであった地方紙『山崎新聞』（兵庫県宍粟市山崎町、龍野中学校で露風と同級生発行）が見つかったという連絡を受けた。全体を読み通したところ、露風は昭和二（一九二七）年六月か

ら昭和五（一九三〇）年十二月まで寄稿していたのである。二七五回程の寄稿には盛岡市滞在から始まる「北日本の旅と自然と」（五十九回連載）などの紀行文のほか、随筆、評論、詩、短歌、俳句があり、その多くは同紙が初出で『三木露風全集』（全三巻、昭和四十九年）にも未収録の貴重な資料であったことに驚喜した。

上代文学研究の拙著を出版した私は、この出会いにより露風に惹きつけられ、さっそく生誕の地である兵庫県たつの市の「霞城館」を訪れ、草稿や創作ノートなどの資料調査を開始した。そして露風の研究者が少ないことから同情されたのか、思いがけず二回連続で科研費の助成を採択された幸運もあり新たな研究の道を歩んでいる。

それは単に研究成果を発表するだけでなく、ゆつくりと楽しみながらである。例えば、多様な仲間たちと「三木露風研究会」(<https://www.nu-cd.jp/kondo/>)を立ち上げた。ゆかりの地であるたつの市や宍粟市、文学講師として勤め童謡「赤とんぼ」の作詞をした北海道北斗市トラピスト修道院、母・碧川かたの生誕地の鳥取市を訪れ、講演会やシンポジウムなどで親睦を深めている。昨年十二月には、たつの市立龍野図書館創立百

周年記念行事に招かれ「三木露風と龍野図書館」と題し、露風が百円を寄付したことがきっかけとなり「多くの好奇心を有し新奇、文明を喜ぶ」龍野の人たちの気質や文化が支えて図書館が開設され、その嬉しさを「ふるさとに文読む人の多ければ国のさかえと我れよろこびぬ」（『山崎新聞』昭和三年八月一日）と詠んだことなどを講演した。

また新しい発見もあった。それは例えば「露風、無名の賢治と交流、送った手紙の控え見つかる」（『神戸新聞』朝刊第一面、二〇二二年八月二二日）や「啄木の歌 記事で酷評 詩人・三木露風が寄稿 新聞見つかると」（『中日新聞』朝刊第三面、二〇二四年一月二三日）などと紹介され、少しだけだがゆかりの地に貢献できた。

最近友人の勧めでAIにより露風研究の問題点を調べてみた。「視点の多様性、未公開作品の評価、研究方法の限界、教育現場での取り扱い」などの問題点を解決することで、三木露風の文学が「より深く理解され、評価されることが期待されます。彼の作品の魅力を再発見するためには、さらなる研究が必要」とあった。

今後露風に興味を持ち、愛好者や研究者が増えることを期待している。

〔元通信教育部教授 通信教育部研究員〕



ことばの世界を 覗き見る

中津 陽菜

読

書

案

内

幼いころからなんとなくことばに興味がありました。テレビの人はどうして自分と違うことばを話しているのか、挨拶はどうして定型文なのか、祖母が驚いたときに言う「おっとしやー」とはなんなのか、など、いろいろと素朴な疑問を持ちながら過ごしていたように思います。そんな疑問をじわじわとほぐしてくれたり、自分の世界を広げてくれたりした本の一部を紹介します。

【黒田龍之助『はじめての言語学』講談社現代新書】

「はじめての」の名の通り、とても読みやすい入門書です。ことばに興味はあるけれど、それがどのようにに解明されるのかはよく知らないというときに読んで、ふーんと思っていました。

【国立国語研究所編『日本語の大疑問』幻冬舎新書（二巻あります）】

「すでにお店に入っているのに」「いらっしやいませ」と言うのはなぜですか」など日本語に関する疑問が一冊に四十くらいあって、それに答える形で日本語のしくみや歴史などが解説されます。目次を眺めているだけでもおもしろいです。

【徳川宗賢編『日本の方言地図』中公新書】

全国二四〇〇か所で三〇〇の語について行った調査結果から、その語形を地図上にプロットした『日

本言語地図』（国立国語研究所）のうち、五〇面の概略と解説が示されています。例えば、単に「イモ」と言ったらどのイモを思い浮かべるか、という質問に対して、私は「まあジャガイモかサツマイモやろ」と思ったのですが、見てみると里芋や山芋と答える地域も多く、大変驚きました。この『日本言語地図』や文法事項について調査を行った『方言文法全国地図』（国立国語研究所）はインターネット上にPDFがあるので、検索して自分の出身地やなんかを見てみると楽しいかもしれません。

【窪蘭晴夫『アクセントの法則（岩波科学ライブラリー）岩波書店】

卒論でアクセントの研究をやるのかなと考えはじめたころに読んで、かなり衝撃を受けました。自分は知らないうちにインストールされた規則に従ってアクセントを出力する装置なんだと思うと、体が自分の手から離れた計算機のように感じられて嬉しかったです。また当時数年前から不思議に思っていた、なぜ初学者の私がラテン語のアクセント付与を簡単にできてしまうのだろうかという疑問まで思いがけず氷解して、お得な気分にもなりました。

以上いくつか紹介してみました。よかったら読んでみてください。

【国文学科助手】



井上ゼミ

(井上優教授担当)

火曜5限

私は二〇二〇年四月に文学部に着任しましたが、国文学科の所属になったのは二〇二三年四月です。ゼミもまだ三年目で、ゼミ生が少しずつゼミの雰囲気をつくつてくれているところです。

私の専門は文法・意味なので、ゼミのテーマも「ことばのしくみ・ことばの意味について考える」としていますが、ゼミ生には、卒業論文では、自分が得意なこと、興味を持っていてることを「ことば」と関連づけて考察するように言っています。卒論で何かを探索するなら、得意なことや興味を持っていることのほうが探索のしがいがあるでしょうし、指導する側にとってもその方がおもしろいからです。

そのこともあって、ゼミ生の研究テーマは実に多様です。あるゼミ生は野球が好きで、野球用語に「死球」「併殺」のような物騒な表現が多いことについて、図書館でいろいろな文献を探し出して考察しました。

別のゼミ生はライトノベルが好きで、ライトノベルのタイトルをたくさん集めて、その特徴と変遷について考察しました。中国語が得意で留学経験もあるゼミ生は、マンガのオノマトペについて日本語と中国語の比較をおこないました。「英語圏のVtuber界隈における集団語」、「初音ミクはただの楽器に成り下がったのか」のように、私が知らない世界のことをテーマに卒論を書いたゼミ生もいます。ゼミ生の発表はどれも必ずおもしろいところがあるので、指導する側にとっては、ゼミの時間は本当に楽しい時間です。

ゼミ生にとっては、ゼミの発表や卒業論文は必ずしも楽しいばかりではないと思います。「おもしろいと思う」と「おもしろさを理解し、自分のことばで説明する」は違います。どのゼミ生も「おもしろい」と思って始めてみたが、調べるのが大変、「興味はあるが、何をどうすれば研究になるかが見えてこない」、「言いたいことはあるが、うまくことばにできない」といったことを必ず経験します。おもしろいことを言っているのに、本人がそれに気づいていないこともよくあります。

しかし、そのようなプロセスがないと、

物事の本当のおもしろさはわかりません。ゼミ生には、相応の時間と労力をかけて観察と考察をおこない、他のゼミ生ともいろいろ話をしながら、自分が得意なことや興味を持っていることのおもしろさについて、少しずつ理解を深めてほしいと思いますし、指導教員としてそのサポートができればと思っています。

(井上 優)



2025_井上ゼミ集合写真

国文学科ヒストリー ②③

1977年(昭和52年)

2月 4日	毒入りコーラ事件
2月10日	日米漁業協定調印(200海里経済水域)
5月10日	『語文』第四十三輯(森脇一夫先生古稀記念論文集)刊行
6月25日	日本大学国文学会総会開催
7月23日	文部省、「君が代」を国歌と規定
9月 5日	王貞治、国民栄誉賞を受賞
9月 9日	大学院学術研究発表会開催
9月28日	ダッカ日航機ハイジャック事件
10月29日	東京スモン訴訟の和解成立
11月30日	立川米軍基地の全面返還
12月 3日	大学院学術研究発表会開催
12月 9日	大学院特別講義

1978年(昭和53年)

1月14日	伊豆大島近海地震(M7.0)
3月25日	『語文』第四十四輯(岸上慎二先生古稀記念論文集)刊行
5月20日	新東京國際空港(成田空港)開港
6月23日	宮城県沖地震(M7.5)
7月 1日	日本大学国文学会総会開催
7月 6日	天皇劇公演中止事件
8月15日	福田赳夫首相、靖国神社参拝
9月16日	大学院学術研究発表会開催
9月25日	『語文』第四十五輯刊行
10月19日	大学院特別講義
12月 5日	『語文』第四十六輯(鈴木知太郎博士記念号)刊行
12月 9日	国文学科学術研究発表会開催

「MBA」の「ダンシング・クイーン」が、また洋画では「ロッキーマン」がヒット。世界ではピンク・レディーがヒットを連発する中、キャンディーズが突然の引退宣言。ビス・プレスリー（42歳）、チャールズ・シャップリン（88歳）、そして稲垣足穂。たのもこの年である。一九七八年は、イギリスで世界初の体外受精児、いわゆる「誕生した年」である。この年に日本で公開された「スターウォーズ」や「未知との遭遇」は多くのファンを獲得した。第一回日本アカデミー賞は山田洋次監督の「幸福の黄色いハンカチ」が受賞した。また「人間の証明」（77年公開）や「野性の証明」など角川映画がヒットした。若者たちの間ではディスコが大ブームになった。

【学内外の動き】 七七年六月、日本大学国文学会総会が開催され、大伏春美、伊藤秀雄、杉谷寿郎らによる研究発表と水谷静夫の講演が行われた。同年十二月五日、鈴木木太郎名誉教授が逝去された。同月に開かれた大学院特別講義では、「古代史を掘る」と題して坪井清足による講義がなされた。あくる七八年三月二十五日、森脇一夫名誉教授が逝去された。同年四月、曾根博義助教が芸術学部より異動。七月、日本大学国文学会総会が開催され、小野未夫、曾根博義、岩城之徳らの研究発表と大養孝の講演が行われた。十月の大学院特別講義では、「中世和歌論」と題して谷山茂による講義が行われた。



1948年稻垣足穂



1977年ディスコ

【国内外の動き】一九七七年は、王貞治が756本のホームランで世界記録を樹立、初めての国民栄誉賞に輝いた年であった。洋楽ではイーグルスの「ホテル・カリフォルニア」や



堀井一摩准教授（近現代文学）研究室

研究室訪問 一問一答

- ①現在の夢は何ですか。
戦争文学とホラーに関する新しい本を書くこと。
- ②ご自身を動物にたとえたとしたら何ですか。
鳩と猫（執念深いところ）。
- ③一番好きな食べ物は何ですか。
永福町大勝軒の中華麺と中華徳大の肉豆腐。
- ④お気に入りの文房具を教えてください。
ペリカン M620 ニューヨークとモンブランのアガサ・クリスティ。どちらも万年筆。
- ⑤人生で一番大切なものは何でしょうか。
冒険。つねにスリルと戦慄に飢えています。

掲 示 板

文理学部資料館展示案内

「読み 読み 学ぶ—日本語日文学資料展—」

会期：5月15日～7月22日

平日 10:00～17:00

土曜 10:00～13:00

日曜 休館

※7月5日(土)・19日(土)は17:00まで延長

※7月13日(日)は特別開館日

※詳細は資料館サイト(QRコード)でご確認ください。



『国文通信』バックナンバー

『国文通信』のバックナンバーを、2016年の創刊号から閲覧することができます。学科サイト(QRコード)からご覧ください。



国文学科短信

令和6(2024)年度国文学科学位記伝達式が3月25日、オーバルホールにて開催された。

昨年度末で任期制職員の渡辺蒼空さんが退職、4月から専任職員として国際関係学部に着任した。令和7(2025)年度は、新たに任期制職員の吉永陽菜(ひな)さんをスタッフとして迎えた。吉永さんの趣味は「映画鑑賞」。今年度の国文学科スタッフ(写真)は、左から助手の徳本善彦さん、杉本なつみさん、吉永陽菜さん、丸茂乃野子さん(以上、任期制職員)、助手の中津陽菜(はるな)さん。



国文学会大会案内

日時：7月5日(土) 14:30～18:00

会場：オーバルホール(図書館棟3階)

講演：日向一雅(明治大学名誉教授)
「文学論の成立—9～11世紀の詩論・和歌論・物語論—」

発表：中津陽菜(国文学科助手)

「三重県度会郡旧南勢町における四拍動詞(五段活用)のアクセント変化」
門脇大(国文学科准教授)
「江戸の蛇髪譚」

同窓会会員新規募集停止と本誌『国文通信』お届け方法の変更について

国文学会では、これまで国文学科の卒業生(大学院国文学専攻・通信教育部含む)を対象に、年会費制(500円)の同窓会会員を募ってきました。国文学科では、より広く気軽に同窓会の輪を広げる目的で、年会費制の同窓会会員制度の新規募集を令和5(2023)年度末をもって停止しました。従来の年会費制の同窓会会員の方には、すでにご案内の通り、これまでの本誌郵送に変えて同窓会メーリングリストへの登録の可否をお尋ねした上で、ご希望の方にはメーリングリスト経由にて本誌のご案内他を差し上げています。本誌バックナンバーについては、上記『『国文通信』バックナンバー』でお示した通り、国文学科サイト(QRコード)からご覧いただくことができます。ご不明の点については、文理学部サイト「各学科へのお問い合わせ」フォーム(QRコード)から、「同窓会会員について」というタイトルでお問い合わせください。



第23号

2025年
6月25日発行

日本大学国文学会
国文通信編集委員会
日本大学文理学部国文学科
同窓会事務局
〒156-8550
東京都世田谷区松上3-25-40

編集後記

◆今年も日大通りの桜のトンネルは、うす紅色に染まりました。満開の桜の中、135名の新入生を迎えました。新入生たちの笑顔を見ると、国文学科の長い歴史が若い世代に受け継がれ、また新たなページが加えられていくのを感じたいです。◆その一方で、学年を越えた交流は少なく、先輩・後輩というタテの仲間意識が次第に希薄になっているのはご時勢でしょうか。在校生でさえ、その点から、同窓会や国文学会の絆は、この先どうなっていくのか一抹の不安が過ります。絆を深める第一歩として、是非ともメーリングリストへの登録をお願いします。

国文通信編集委員会